『アパシー　学校であった怖い話　新生』の裏話　その二

飯島多紀哉

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=10029515

オリジナル, 学校であった怖い話, 小学怖, 七転び八転がり, アパシー, ホラー, エッセイ・ノンフィクション

boothで『アパシー　学校であった怖い話　新生』が発売されましたぁ!!
それを記念して、裏話の第二弾を書きたいと思います。

Table of Contents

『アパシー　学校であった怖い話　新生』の裏話　その二

それでは裏話の第二弾。

まず今回の全七話はとにかく怖い話を書こうと思って書いたわけだが、
怖い感覚というのは、人によって全く温度差が違う。
グロが駄目だけれどお化け屋敷は大丈夫とか、グロ平気だけれど精神的に来るのは駄目とか、
人によって大きく幅がある。

だから、人によってはちっとも怖くなかったというものが
特定の人間の心には突き刺さるというのはよくある話だ。
なので、今回は色々なタイプの怖い話を選んでみた。
精神的に嫌なもの、よく考えると怖い話、直接的なもの、心霊的なもの、モンスター、等々。

だから、話の中でツボにはまったものもあれば肩透かしを食らうものもあったかもしれない。
すべて楽しめたという方は個人的に大変ありがたいと思うし、おそらく感受性が豊かなのであろう。
逆にどれも楽しめなかったという方がいれば、それは怖さの愛称が僕とは合わなかったということだろうか。

ちなみに、今回の七話を描くにあたり一つ大きく悩んだことがある。
それはイジメをテーマにしたものが二つあったということだ。

どちらも小学生のイジメであり、小学校であった怖い話はいじめが結構取り上げられることになる。
どうしても、子どもがこの前まで小学校に通っていたから、
その現場に自ら触れることで見えてくるものはたくさんある。
もちろん、陰湿なイジメも現実に見てきた。
だからイジメを描いたわけではない。
出来ればイジメ問題は取り扱わないほうが良いかなとも思った。
それも、二つも描くのはどうかなぁと自分でも思った。

それで何度も自分の作品を読み返して、
やはり載せよう、そして載せるならば二つ同時に載せるべきだと決断した。
そして、イジメの行為部分はあえて書き直して似通った展開と内容に作り替えたりもした。
あえて、表面的には似通ったものにわざと書き換えてみた。
おそらく発表の場が同時でなければ修正を加えなかっただろう。

どうしてか？
皆さんは気付いただろうか。
このイジメには決定的な違いがある。

まず『危険な転校生』で松岡が行うイジメは実に陰湿だが、彼には目的があるということ。
イジメを通じてクラスの共通意識を高め、最終的な目標のためにイジメを遂行していく。
だから、彼にとってのイジメは必然だ。
もちろん、悪気なんか微塵も感じていない。

比べて『呪いの法則』の中井さんはイジメを楽しんでいる。
イジメそのものが楽しいから、理由はない。その時楽しければそれでいい。

短絡的で非常にわがままな行動だ。
もちろん、彼女も悪気なんて感じてない。

この行動理念の違いこそが、あえて二つのイジメを載せた原因である。

そして、イジメられる子供に対してそれぞれの親は自分の考えうる最大の優しさをもって接する。
一見似ているが、この二人の父親は本質が大きく異なる。
新堂は直線にストレートを投げてくる。真っ向から子供とぶつかる。
遠藤は、間接的に変化球を投げてくる。包むように見守りつつ救いの手を差し伸べる。

実は、この二つの話は何度も何度も読み比べながら、
時にはわざと内容を似せつつ、そして時には相反する対応を見せたり、
とにかく悩んで何度も書き直した。

お気づきだろうか？
それぞれの話には二人の関係に関わってくる大事なキーマンがいることを。
『危険な転校生』では金沢がその役であり、
『呪いの法則』では滝山がその役に当たる。

この二人はそれぞれの話においてイジメのテーマのカギを握る大事な役割である。
『呪いの法則』においてイジメを単なる遊びと捉える中井は、滝山に対して何も影響を与えない。
最後まで怯える滝山は、遠藤が仕掛けた呪いの陰に苦しんで生きることになる。

『危険な転校生』においてイジメを目的を達成するための手段として扱う松岡は、
配下とした金沢を大きく変え、多大な影響を与えることになる。
物語が終わっても、生き残った人たちのその後を考えると、その人生は膨らむはずである。

もちろん、いじめをすることは悪いことでありそれを推奨するつもりもない。
ただ、イジメはいじめっ子を不幸にするだけでなく、
それに携わる多くの人々にも様々な影響を与えていくということは描きたかった。

いじめを二つも扱ってしつこいかな？と感じつつも頭を悩ませた。
もし、それに気づいてもらえたら嬉しい。
また、これからこの点に気をつけて読み返してもらえたら、
違った感覚を味わってもらえるかもしれない。
あまり感じてもらえなかったら、それは単に僕の力量不足なのだろうな。

ちょっとした脇役にもドラマがあり、彼らの人生がある。
そんなことを考えながら一人一人の登場人物に愛情を注ぎながら書いてみた。
今回の作品も、皆さんに末永く愛してもらえたら作者冥利に尽きる。

でも、こんな深読みをせずに楽しんでもらえればそれでオーケー。
僕の込めた思いが知らず知らずにどこかに引っ掛かり、
いつかふと思い出してくれたら、それもまた嬉しいのである。